

2014年度 学生懸賞論文の総括

伝統ある『学生論集』節目のこの第30号に向けて、応募総数54編であったのは、いささか寂しい。まして、30号以前、「論集」の前史として、『経済学論集別巻学生論文集』があったのだと聞けば、なおさらである。また、前年度応募が70編余、さらにその前年度が100編余と振り返って見れば、何がしかの危機感さえ兆してこよう。

各学部、各ゼミナールの研究・教育活動を基盤としつつ、趣旨としては課外活動、各学部・各ゼミの「親元」を離れての、オープンな「他流試合」、しかもそこに賞金を懸けて、競い合う。それがまた日常の授業を活気付ける。そのような本学『学生論集』の良き伝統にいささかの陰りが見えたとするなら、教員一致して学生を鼓舞していかなければなるまい。

さてそもそも論文とはどのような文章か？いろいろなとらえ方があるだろうが、論文の論はまず、論争の論であり、かつまた論理・論証の論である。論争において自分の仮説を他に納得させるには、論理的な文を以って、証明していかなければならない。データ、資料を集めて並べるだけではなく、それを自説に有利になるように、組み立てなければならぬ。

パソコンやスマートフォンの普及によって膨大な資料の検索・収集が可能となり、学生諸君の論文もその面では遜色がない。それを論理的に組み立てる手捌きもそれなりに堂に入っている。少し物足りないのが論争的な勢いである。所謂「通説」を打破しようとする若い学生らしい意気込みよりも、お行儀の良い大人しさが感じられる。勿論、それが悪いことではないのだが。

例年通り設定された「書式」への適合性を主とした予備審査を委員会で行い、54編（うち2編は取下げ）から33編が合格した。「書式」は文字通り形式と思われがちだが、論文においては重要な要素である。つまり、この形式の共通性が「論争」の共通基盤を為すとも見えて、極論すれば、それは内容よりも重要とさえ言える。それはともかく、「書式」に関しては次年度に向けてさらに検討を要する。

各論文のテーマを専門とする複数の教員による本審査を実施し、さらにその結果を委員会で検討し、別掲の通り、佳作3編、準佳作2編を入選とした。関係各位のご協力ご助力に深く感謝の意を表します。(2015年3月)

学生論集刊行委員会

国松 夏紀 (国際教養学部)

中野 瑞彦 (経済学部)

梅田百合香 (経済学部)

石田あゆ (社会学部)

野田 俊範 (経営学部)

松村 昌廣 (法学部)

大久保正人 (法学部)